
平和

石橋綾詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和

【Nコード】

N8204Y

【作者名】

石橋綾詩

【あらすじ】

魔王が目覚め、平和な世界で魔物が暴れはじめ。その中、待ちに待った勇者が現れるが…。

プロローグ・目覚め

- 目覚め -

「キヤー！」と、逃げ惑う人々の悲鳴や、「助けて」という、人々の叫び声が聞こえる。化け物は黒く、2メートル以上もある熊のようなものや、犬のようなもの、1メートルほどもあるコウモリのようなものなどがいた。その中「みんな教会に逃げるんだ！早く！！」と若い男の声が聞こえる。人々はそれを聞くと、村に一つしかない、小さな教会へと逃げはじめた。

最後の一人なのだろうか。その人の中に入れると扉は閉められた。ここには怪我をしている人、泣いている人、子供を連れている人、様々な人がいた。

「あの化け物はいったい何なの？」

「あいつらは魔物だ」

「魔物？」「そうだ。魔物が現れたということは…やつが目覚めたのか！？」

「やつとは？」

「昔、勇者によって、封印された魔王、サタナエル…」

「そんな！私たちはこれからどうすれば…」

「神に祈るしかないだろう…。そして、再び勇者が現れるのを待つしかない」

「…神よ」

教会にいた人々が皆、神を模した像に向かって、祈りはじめた。

夢の世界へ

彼女はこたつで大きなあくびをしながら「暇だなー」と一言。

今は冬休みなのだが、友達との約束もなく、課題も終わってしまい、暇なようだ。

「眠くなってきたかも」

と言い、そのまま彼女は眠ってしまった。

同じとき

彼は自分の部屋、といつても家具もなにもない場所にいた。

「なんで俺までそっちに行かなきゃいけないんだよ」

「だって、お父さん一人じゃ心配じゃない」

「なら、母さんだけ付いていけばいいだろ」

「あんた一人じゃよけい心配よ」「もう18なんだから一人でも平気だって」

「駄目です！ほら、行くわよ」

彼は、この部屋から嫌々ながらも出ていった。

彼女は、古びたベッドの上で目覚めた。彼女は起き上がり周りを見回した。そこには、四角い窓が一つ、白いカーテンは開けられ、外から暖かい日差しが入ってきている。他には、丸いテーブル、それに合わせた丸い椅子が四つある。その一つに男が一人、座っていた。「あの……」

彼女は恐る恐る、男に声をかけた。

男は振り返った。

「おお！起きたか」

男は黒く短い髪をしていて、瞳は蒼く、肌は白い。彼女がいた国では、あまり見かけない風貌をしていた。

「はい…」

「俺はステーク。この村の長をしている。早速で悪いが…。君は神に選ばれし勇者なんだ」

「えっ!？」

「もちろん一人ではない。もう一人いる」

「もう一人は？」

「まだ目覚めていない」

「そうですか…」

「それで、君にまずやってもらいたいことがあるのだが、付いてきてくれるか？」

「はい」

ステークは、立ち上がり、予め用意していた、自分のものなのだろう、彼女には大きめのサンダルを手渡した。

「それを履いてくれ」

「はい」

彼女はベッドから降り、そのサンダルを履いた。やはり大きかったようだ。ステークは、履いたのを確認すると、ドアの方へ歩き始めた。彼女は小走りでステークの後を付いていった。

外に出ると、とても暖かく、蝶が目の前を通りすぎていく。足下を見ていると、花が咲いている。

「今は春ですか？」

彼女は、ステークの後ろを歩きながら聞いた。

「そうだが、今だけじゃなく、ずっとこの気候なんだ」

「ずっと春なんて良いなあ…」

「君ところは違うのか？」

「私のところは、一年を通して、春夏秋冬あります」

「やはり夏は暑くて、冬は寒いのか？」

「はい。この世界はどこも、春なんですか？」

「いや。四つ大陸があり、それぞれ季節が違うんだ。東にある大陸が春。西にある大陸が秋。南にある大陸が夏。北にある大陸が冬だ」

「それじゃ、ここは東にある大陸なんですねっ」

「そうだ。おっ！着いたぞ」

「…教会ですか？」

「そうだ。中に入るぞ」

「はい」

ステークが教会の扉を開いた。

教会の中は、長椅子がきれいに並べられていて、真ん中に通路ができていた。その先には、白い女の形をした像が見える。この世界の神なのだろう。像の前までステークと、その後に付いて歩く彼女は来て、立ち止まった。

「この像に触ってみろ」

「はい」

彼女はゆっくり手を伸ばし、女神像に軽く触れた。すると、突然輝きだし、彼女は驚いて手を離れた。すると、輝きは消えてしまった。

「おお！君には魔力があるようだ」

「どうして解るんですか！？」

「この女神像は、魔力のある者が触ると輝くんだ」

「そうなんですか。急に光るからビックリした…」

「よし！広場に行つて練習するぞ」

「は、はい！！」

そう言つて、ステークたちは教会を出て、先ほど通つた広場に向かった。

広場に着くと、

「まず、その属性の神と契約しなければならぬ。まずは、風だ」

「何ですか？」

「自然界に多くある物は、少しの魔力で魔法が使える。だから、初心者には丁度いいんだ」

「そうだったんですか」

ステーキは頷いた。

「それじゃ、いくぞ」

「はい！」

「風を司る神クレイオスよ、この者に力を貸したまえ……」

すると、風が彼女を包みこんだ。だが、暫くすると何処かに消えてしまった。

「これで終わりだ。君は、クレイオスに認められた。試しに、あの木の枝を揺らしてみろ」

「どうやってですか？」

「命じればいいんだ」

彼女は静かに口を開いた。

「風を司る神クレイオスよ、風を操り、あの枝を揺らしたまえ……」
カサカサ……。枝が揺れた。

「で、できた！」

「あとは、これを見ながら自分でやれ。俺は、もう一人の様子を見
てくる」

「はい！わかりました」

ステーキは、持っていた本を彼女に渡すと、来た道に戻って行った。

「おい！」

「ん……」

「起きたか!？」

彼は、ステーキによって起こされた。

「誰……」

彼は寝ぼけ眼でステーキを見つめる。

「俺はステーキだ」

「ステーキ？」

「まあ、まずは布団から出る」

「……はい」

彼は布団をどけると、起き上がった。

「ここは？」

「ここは、ドワン村、君のいた世界とは違う世界だ」

「違う世界!？」

「君は、この世界を救うために、神に選ばれた勇者なんだ」

「俺が…勇者!？」

「そうだ。それで、まず君にやってもらいたいことがあるんだが」

「何ですか？」

「ベッドの脇に置いてあるサンダルを履いて、俺について来てくれ」

「わかりました」

そう言うと、彼は言われた通りにサンダルを履き、ステーキの後を付いていった。

外に出て、少し歩いたところに、広場があり、そこには、女の子が一人いて、本と睨めっこしている。その横を通り、教会の前に着いた。ステーキは、扉を開けると中に入ってしまった。彼もその後について中に入った。そして、真ん中の通路を進み、女神像の前で止まった。

「この像に触ってみろ」

「はい」

彼は、なんのためらいもなく像に触った。

「変化なしか」

彼女のように像は輝かなかった。「何かあるんですか？」

「この像に、何の変化がなければ、魔力が無いということだ」

「そうなんですか…」

彼は残念そうだった。

「外に出るぞ」

「はい」

ステーキたちは、教会を出て、彼女の元へ向かった。

広場に着くと、ステーキは彼女に声をかけた。

「終わったか？」

「はい！全部できました！」

「全部！？そうか…」

彼女は不思議そうな顔をしている。

「なら、こいつと一緒に剣の練習でもするか？」

「はい！」

「じゃあ、ここで待ってる。今から道具を持ってくるから」

「わかりました」

そう言うとステーキは、一人で何処かに行ってしまった。

残された二人は顔を見合せた。彼女は微笑み、彼に話しかけた。

「私は、イノリ。よろしくね」

「俺は、トワ。こちらこそ、よろしく」

「貴方が、もう一人の勇者さん？」

「そうだけど…。勇者は二人いるの？」

「そうみたい」

「そうか。イノリって、呼んでもいい？」

「もちろん！私も、トワって呼んでいい？」

「うん」

話をしていると、ステーキが男を二人連れ、道具を持って戻って来た。

「これを使ってくれ」

二人は、木でできた剣を、一本ずつ渡された。

「この二人が稽古つけてくれる」「僕は、アル」

ステーキの右側にいる男だ。

「俺は、ミロクだ」

こちらは、左側の男だ。

「アルが女で、ミロクが男を相手してやれ」

「よろしくお願いします」

イノリとトワは、声を揃えて言うと、同時に頭を下げた。

「名前は？」

「私はイノリっています」

「俺はトワです」

「じゃ、イノリちゃんは、僕と一緒に向こう側でやるか」

「はい」

「じゃ、俺たちはここでやるか」 「はい」

こうして、稽古がはじまった。

「ハア、ハア…ハア」

稽古が始まって、一時間がたった。

「休憩しようか」

「はい」

イノリとアルは、稽古を中断し、その場に座った。

「休憩が終わったら、試しに二本でやってみたいんですけど、駄目ですか？」

「いいんじゃないかな。じゃ、もう一本持ってきてあげるよ」

「すみません！お願いします」

アルは、立ち上がり、剣を取りに走って行った。

イノリは、地面に膝を抱えて座り、トワの稽古風景を眺めていた。

「お前、なかなかやるな」

「ありがとうございます」

稽古を始めた時は、防戦一方だったトワも、今では、攻める余裕ができたようだ。

暫くすると、アルが今まで使っていた物よりも一回り小さい木の剣を二本持って戻って来た。

「はい。これなら女の子でも、使いやすいと思つよ」

「ありがとうございます」

イノリは剣を受け取った。

「じゃ、始めようか」

「はい」

そうして、日が暮れた。

「今日はこれで終わりにしよう」ステーキの一言で四人の動きが止

まった。

「今日は明日に備えてゆっくり休め」

「明日なにかあるんですか？」

イノリがステークに問いかけた。「明日から、君たちは旅に出るんだ」

「もう!?!」

イノリとトワは、とても驚いているようだ。

「そうだ。もう魔王は目覚めている。だが、まだ完全にはない。だから、完全に目覚める前に魔王を封印しなければならない」

「何処に居るんですか？」

「それは解らない」

「封印はどうやってするんですか？」

「それも解らない。だから、旅をしてそれを調べてくれ」

「何も解らないんですか!?!」

「すまん……」

「そうですか……」

「しょうがないよ。今日はもう休もう？」

トワがその場の空気を明るくしようと声を張り上げた。

「そうだね!」

「アル、二人が使う部屋に案内してやれ」

「わかりました。じゃ、行こうか」

アルは二人の方に振り返った。

「はい!」

二人はアルに付いて行った。

広場を出て、直ぐの建物。

「二人の部屋はここと、隣だよ。お風呂とトイレは奥にあるから。

それと、ご飯の時は呼びに来るから、それまでゆっくりしててよ」

部屋の中は、ベッドがあり、奥に扉があるだけのシンプルな部屋だった。

「「わかりました」」

二人が返事をする、アルは出ていった。

「私が、こっちの部屋でいい？」

「うん。じゃ、自分の部屋に行くね」

「うん」

二人は、部屋に入っていた。

その後、アルが呼びに来たが、二人は疲れてしまったのだろう。ぐっすり眠っていたので、アルはそのまま寝かすことにした。

春との別れ

窓の外から、日差しと共に、鳥の鳴き声が部屋の中に届く。

「ん…。もう、朝か」

イノリはベッドから出ると、そのままお風呂に入るため、奥の扉の向こうへ行ってしまった。

同じとき

トワは、まだ眠っている。

お風呂から出て、サッパリしたイノリは、トワの部屋の前にいた。

いくらノックをしても出てこないで、イノリは諦めて部屋に戻るうとした。が、部屋の扉がゆっくり開いた。中を覗くと、眠たそうに目を細めているトワの顔が見える。

「もしかして、起こしちゃった？」

トワは、首を横にふった。

「それなら良かった」

「中に入る？」

「えっ！？いいの？」

「俺は、風呂入るし、かまわないよ」

「昨日のうちに入らなかったの？」

「うん…。部屋に戻って、ベッドに少し横になってたら、いつの間にか寝てた」

「同じだ。私も寝ちゃって、さっき入ったばかり」

「じゃ、俺は入るけど…」

「私は、部屋に戻るよ。じゃあねっ」

「うん」

イノリは、自分の部屋に戻り、トワは、部屋の扉を閉めた。

イノリは、部屋に戻り、ぼーっと、ベッドに座って外の方を眺めて

いると、ノックをする音が聞こえ、イノリは扉を開けに走った。開けて、外を見ると、トワが立っていた。

「暇だし、何か話でもしよう」

「うん！じゃ、入って入ってっ」

「うん」

トワが部屋に入ると、イノリはベッドに座るように勧め、自分もその隣に座った。話始めようとした、

そのとき、ノックをする音がまた聞こえ、イノリは急いで扉を開けた。外には、アルが立っていた。

「おはよう。朝食の用意ができたから呼びに来ただけど、もう大丈夫かな？」

「はい。大丈夫です」

「二人とも付いてきて」

「はい」

二人は、アルに付いていった。

アルに連れてこられた場所には、ステーキがいて、丸いテーブルには、すでに朝食が並べられていた。

「適当に座ってくれ」

「はい」

二人は隣り合わせに座った。

「冷めないうちに頂こう」

「いただきます」

トワが食べ始めた。

「いただきます」

イノリも食べ始めた。

それを見たステーキも食べ始めた。食事中は会話もなく、静かなものだった。

朝食を食べ終わると、

「旅の支度はできている。まずは服だが、君にはこれを。お前にはこれを」

イノリには、服と靴、帽子が渡された。トワには、服と靴が渡された。

「まずは、着替える」

「何処ですか？」

「君は、隣の部屋で」

「わかりました」

イノリは着替えを持って、隣の部屋に行ってしまった。

「お前は、ここでもかまわないよな？」

「はい」

トワはそのまま、着替え始めた。

暫くして、トワは着替え終わり、イノリが戻ってくるのを待っていると、隣の部屋の扉が開いた。そこには、黒く、縁が大きい三角帽子、その帽子には舌がついていて、笑っているように見える。髪は、ツインテールにしているが、腰辺りまである。に、こちらも黒く、ローブなのだろうか。丈が短く、ふんわりしていて、膝上10〜15センチくらいだろう。袖は、少し長く、手首の方は、広がっている。靴下も黒く、これは長い。膝の上くらいまである。それをガーターベルトで止めている。そして、黒いショートブーツを履いている。とても可愛くて、トワは思わず見惚れてしまった。

そんなトワの格好は、白い長袖の上に青いマント。手に黒い手袋、ベルトは茶色く、ズボンは、黒い。そして、茶色いブーツを履いている。

「着替えは済んだようだな」「はい」

「君の荷物は帽子の中に入れておいた。帽子に命じれば、出してくれる。しまいたいときも、命じればしまってくれる。一応、旅の途中にでも確認してくれ」

「はい」

「お前は、これだ」

トワは、鞘に収まった剣と、盾を受け取った。

「これから大変だろうが、二人で力を合わせて乗り切ってくれ」

「はい」

「金は、旅をするうえで必ず必要となる。金は、魔物を倒し、近くの町に持って行くと、金に替えてくれる。なるべく、きれいなものの方が多く、金がもらえる」

「はい」

「それじゃ、村の入り口まで一緒に行こう」

ステーキが立ち上がり、続いてイノリとトワも立ち上がった。そして、村の入り口まで歩いた。「このまま真っ直ぐ行くと森がある。」

そこを抜けたら北に進め。そうすれば町に着く。夜は、とくに魔物が出やすいから気を付ける」「はい」

「何か解らないことがあったら、手紙を飛ばしてくれ」

「わかりました」

「じゃ、頼んだぞ」

「はい!!」

二人は、ステーキに見送られ、旅立った。

ヘレネスタウン

「私たち、けっこう歩いたと思うんだけど、まだ森見えないね」

「ん！？見えてきた！」

「ほんと！？どこどこ？」

イノリは、キヨロキヨロと辺りを見渡した。

「あそこだよ」

トワは、森が見えたという方を指差した。

「ホントだあ」

「もう少しだから、頑張ろうな」

「うんっ！」

二人は森の見えた方へ歩いた。そして、二人の姿は、少しずつ遠ざかり、森の中に消えていった。

森の中を二人は歩いていった。

「昼間なのに少し暗いね」

「そうだね。イノリ、転ばないように気を付け」

「あっ」

イノリが木の根につまずき、転びそうになった。それを、トワは前から抱き止めた。

「言ってるそばから、転ぶなよなあ」

「ごめん…」

「気を付けるよあ」

そう言つと、トワはイノリを離した。

「ありがとっ。でも、トワがいるから大丈夫だよねっ。エへへ」

「まあ、そうだけど…」

「じゃ、手繋ごっ？」

そう言つと、イノリはトワの手を握った。

「これで、安心！」

「そう、だな…。じゃ、行くぞ」

トワは照れているのを隠すように歩き出した。

「うんっ！」

「今日は、大分歩いたね」

もう周りは暗く、二人は晩ご飯を食べた後だった。

「そうだな。今日は、もう休もうか」

「そうだね。何か寝袋みたいなものないかな」

と、イノリは、帽子に聞いた。すると、帽子の口が開いた。

「おっ！」

イノリは帽子の口の中に手を入れて、何かを出した。

「すごいな…」

トワは、それを横で見ながら、苦笑いしている。

「寝袋が出てきたあ」

口の中から二つ、寝袋を出し、一つをトワに渡した。

「じゃ、寝よつか」

「うん」

トワは、寝る準備を始めた。

イノリも、その横に行くと、寝る準備を始めた。

準備ができた二人は、横になっていた。

トワはイノリの方を向いた。

「おやすみ」

イノリもトワの方を向いた。

「おやすみ」

そう言つと、二人は目を閉じた。

イノリは、何かの音で目覚めた。まだ、周りは暗い。カサカサ…。草の擦れる音だ。イノリは、音がした方を見た。だが、何も変わったことはない。

「風かな…」イノリは、もう一度眠ろうと目を閉じた。

カサカサ…。また音がする。イノリは、また音がした方を見た。やはり、何も無い。気になったイノリは、寝袋から出ると、靴を履き、音がした方へ歩いた。すると、黒い毛をした狐がいた。

「うわぁ！かわいい！」

イノリは、狐の頭を撫でようと手を伸ばしたところで、狐が啼いた。「うわっ！」

すると、その狐の仲間が、突然、草木の陰から現れた。その数10匹、…。いや。もっと多い。

「増えた！」

イノリが驚いていると、狐の群れが勢いよく襲いかかってきた。

「えっ！？何で？私、何かした！？」

と、焦ってはいたが、すぐに真剣な顔になった。

「大地の神ガイア。私の力を使い、鳶を這わせ、やつらを捕らえろ！」

すると、鳶が絡み合い、網の形に変化した。そして、易々と狐たちを捕まえてしまった。

鳶の網で捕まった狐たちは、網の中で暴れている。

「眠りの神ヒュプノス。私の力を使い、奴等に静寂を、安らかな眠りをあたえろ」

たちまち、今まで暴れていた狐たちは動きを止め、静かに眠ってしまった。

「もういないよね？」

イノリが、周りを見回していると

「イノリ！？」

イノリは、突然声が聞こえたので、驚き、勢いよく振り返った。そこには、トワが立っていた。

「なんだよ。びつくりしたじゃん！」

「ごめん、ごめん」

「もう」

周りはまだ暗い。

「俺、もう寝れそうにないんだよなあ」

「私も」

「暗いけど、先に進めるか？」

「大丈夫だよつ。ウイスプ！」

「ウイスプって？」

「光の妖精だよつ。ほら！」

丸く光る物が、目の前に現れた。

「ウイスプ。今からこの森を出るから、私たちの前の道を明るく照らして」

光は瞬いた。

イノリは狐たちを帽子の中にしまった。

「トワ、行こう！」

イノリは、トワの手を掴むと歩きだした。

「お、おう」

トワも歩きだした。

「森から無事出られて良かったね！」

「うん。森の外は大分明るいな」

森の外は平原で、草木が朝日を受け、照らしだされていた。

「そうだね。ウイスプ、ありがとう」

光は瞬くと、消えてしまった。

「じゃ、行こつ」

二人は手を繋ぐと、町に向かって再び歩き出した。

日は高く昇っている。だが、二人はまだ歩いていた。

「こっちで良いのかな？」

「えっ！？解んなかったの！？」

「うん。こっちだと思ったから…。ごめんね？」

「いいけどさ…。これだけ歩いて見えてこないんだから、町はこっちじゃないんじゃないか？」

「そっだよね…」

「空とか飛べないの？」

「飛ぶ…？あっ！飛べるよ！」

イノリはそう言うと、帽子から杖を出した。その杖は、木製でイノリの腰くらいの長さがある。それで何やら地面に書き出した。

「何書いてんだ？」

「魔法陣つてやつだよお」

「手伝うことある？」

「大丈夫！もう終わる、からっと！よしっ！」

イノリは魔法陣の真ん中に立ち、杖を胸の前に平行に持った。

「私たちに力を貸せ！グリフィン」

イノリが言い終わると、魔法陣から、頭、前足、翼が鷲で、後ろ足がライオンという、変わった姿をした鳥が現れた。

魔法陣は鳥が現れると消えた。

「最初からそうしてればな…」

「まあまあ。いいじゃん？！早く乗ろ？」

「そっだな。じゃ」

トワはイノリを抱き抱えた。

「えっ！？ちよっ…」

「おとなしくしてないと、落とすかもしれないぞ」
トワは笑いながら言う。

「やめてよお」

「わかってるよ」

「ありがとう」

トワは笑顔で応え、イノリをグリフィンの背に乗せた。
続いてトワもグリフィンの背に飛び乗った。

「グリフィン、いいよお」

イノリの合図で、グリフィンは二人を乗せ、飛び立った。

「うわあゝ。ほとんど逆方向だったね」

イノリは苦笑いしつつ言う。

「これじゃ、いくら歩いたって着くわけないよな」

「ねっ！でも、もう着くから良かったよねえ」

「まあな」

「着いたあ」

「ヘレネスタウンだってよ」

「ホントだあゝ。そういえば町なんだし、あの狐たちをどうにかできるよね？」

「できるだろ」

「何処に行けばいいのかな？」

「あそこじゃね？」

トワが指差した場所は小さな小屋で、魔物らしい物を入れた袋を持つ人が何人も入って行くのが見えた。

「かもしれないね！行ってみよっ」

「うん」

二人は小屋に向かって歩き、中に入った。入って直ぐの所に、テーブルがあり、その向こう側に男が座っていた。男はテーブルの上に置かれた魔物を見ていた。

「これだと…、850ロン」

お金を客に渡した。

次に並んでいたイノリたちを見た。

「次のお客さんどうぞ」

「あ…はい！…イノリ？」

「…。あ！ごめんねっ。ちょっと待って」

イノリはブーツとしていたようで、トワに声をかけられると、急いで帽子の中から、森で現れた狐たちを引っ張り出した。

「はいっ。お願いします」

テーブルにあの狐たちをドサツと置いた。

その状態をみた男は

「これは生きているみたいだ…」と呟いた。

「寝ています。殺さなきゃ駄目でしたか？」

「いや！そんなことはない。こんな綺麗な物を見るのは初めてだ！

これなら、20000ロンで買おう！」

「ありがとうございます！」

イノリはお金を受け取ると、トワの方に振り返り一目見て微笑むと、店の出入口に向かって歩き、ドアを開けた。トワはその後に続いて店を出るとドアを閉めた。

外に出ると

「これで宿に泊まれるよね？」

疲れたような顔をしている。

「大丈夫だろ。すぐ宿に行くか？」

「うん。もう疲れちゃったから」

「ん…。じゃ、あそこだな」

宿屋を見つけたようだ。

トワはイノリに背を向け、しゃがみ込んだ。

「イノリ、乗って」

「えっ…。でも…」

「大丈夫」

トワは顔だけイノリに向けて微笑んだ。

「…うん。ありがとう」

イノリはトワの背に乗った。

トワは立ち上がり、さっき見つけた宿屋に向かって歩き、宿屋ヤジランという看板の出ている場所で足を止めた。

「着いたよ。降りる？」

「うん。ありがとう」

イノリは微笑んだ。

トワは微笑み返すと、イノリの手を握った。

ヤジランは、周りの民家と同じような造りの建物だった。

二人は中に入った。

「ここで待ってて。俺が行ってくるから」

「うん。お願いね」

イノリはさっき貰ったお金をトワに渡し、近くにあった椅子に座った。

トワは、それを受け取りカウンターに向かった。

カウンターには、小太りの優しそうな、おばさんがいた。「部屋を借りたいんですけど、空き部屋ありますか？」

「今は、お客がいっぱい…。あつ！でも、まだ一つだけ空きがあるよ！一人部屋になっちゃうけど、どうするかい？」

「それでいいです」

「はいよ！1000ロンだけど…。あなた、なかなかのイケメンだからねっ、おまけしちゃう！500ロン！」

「ありがとうございます」

トワは、微笑むと、おばちゃんにお金を渡した。

「部屋は、二階の一番奥の右側だよ」

トワは鍵を渡された。

「わかりました」

トワはイノリのもとに戻った。

「部屋あったよ」

「ホント！？やったあ！」

「良かったな」

二人は自分たちが借りた部屋に向かって、歩きはじめたところで、ふと掲示板に目が留まる。そこにはイベントについてのチラシがあった。

イベントはこの町にあるコロシウムで行われるようで、優勝したグループには、魔王についての情報と、お金が貰えるらしい。受付は、コロシアムの入り口で、明日まであるようだ。

二人は目を合わせると、宿屋を出た。

コロシアムの場所は、すぐにわかった。

二人はコロシアムに向かった。受付までは看板が出ていたので、すぐに着いた。

コロシアムの壁は、灰色で、とても高かった。

受付を終えた二人は、宿屋に戻り、すぐお風呂に入り、ご飯を食べ、眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8204y/>

平和

2011年12月18日05時45分発行